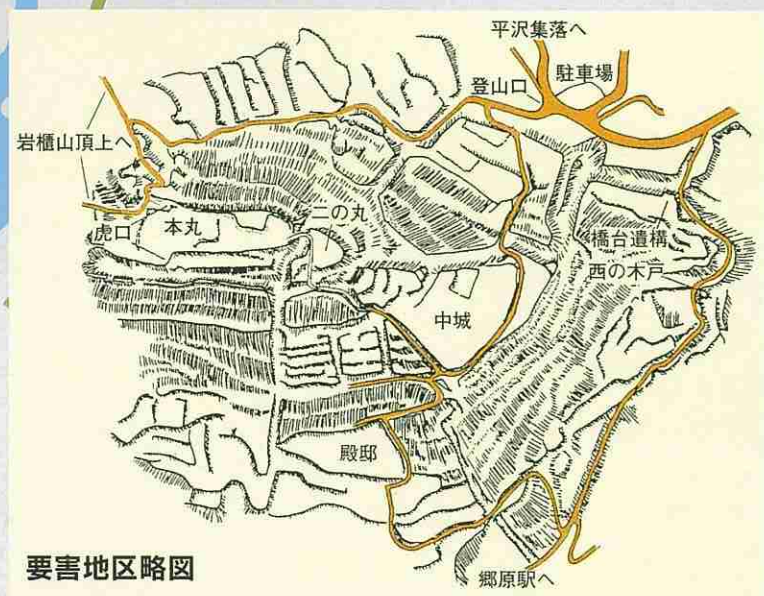


岩櫃城周辺図



岩櫃城は岩櫃山（標高 802 m）の中腹東面に築かれた典型的な中世の山城です。頂上より約 200 m 下がった場所（標高 593 m）に本丸・二の丸・中城があり、この場所を中心に広い範囲を城域としています。また、近くに 2 つの支城、北東側に柳沢城と岩櫃山南側に郷原城を持っています。通称バンジョウ坂を東端とし、西側は本丸のある中心地から距離

にして 400 m ほど上がった所を端としています。この東西を両端とする北東方面へ 1.9km 延びる尾根線上に主たる遺構があります。南側は切沢の谷を自然の堀にして南西の境とし、南東側は岩櫃山の山裾の斜面を壁面として、さらに吾妻川を自然の堀に活用し、限界としていると考えられます。北側は不動沢が境界線となっています。



いわびつじょうあと 岩櫃城跡

群馬県東吾妻町観光協会

吾妻氏、真田氏の歴史舞台。武田領内の三名城

戦国の歴史を刻む岩櫃城

群馬県の西部に位置する吾妻の地は自然景勝に富み、多くの名所・旧跡が点在しています。中でも特にすぐれた八カ所は吾妻八景と呼ばれ、広く観光客などに親しまれています。東吾妻町の北東にそびえる岩櫃山（標高八〇二メートル）は吾妻八景を代表する景勝地として知られています。この山の中腹に吾妻の歴史舞台となった岩櫃の城跡があります。



「本丸下堅堀」
本丸下に延びる長大な堅堀。幅も広く、規模の大きさが伺える。



「東の木戸」
西の木戸と対応し、城下町の東端を固めていた。



「東の木戸」
西の木戸と対応し、城下町の東端を固めていた。

「上州吾妻郡岩櫃古城之図」（長野県長野市立真田宝物館蔵）

このほかに西面図があり、岩櫃城に関する文献資料としては極めて少ない中の1つ。



岩櫃城本丸跡
25 m × 15 m の建物の土台状の遺構があり、展望台、指揮台を兼ねての中枢部と考えられている。参考資料：「岩櫃城跡保存整備計画報告書」吾妻町教育委員会

岩櫃城の歴史

岩櫃城は、年代は定かではありませんが、南北朝のころ築城されたと考えられています。城郭の規模は一三六畝と上州最大規模を誇り、後に甲斐の岩殿城、駿河の九能城と並び武田領内の三名城と称されました。この城の城主として最初に名前が出てくるのが吾妻太郎行盛です。行盛は南北朝時代、南朝方の里見氏に攻められ吾妻川原において自害したという伝説があります。その後行盛の子千王丸（斉藤越前守憲行）が北朝方の上野守護上杉憲顕氏の支援によって岩櫃城を奪回し、その子孫が戦国時代までこの城を本拠として東吾妻を支配しました。

永禄六年（一五六三）、武田信玄は上州侵略のため、家臣真田幸隆に岩櫃城攻略を命じました。ときの城主は吾妻太郎行盛より数えて六代目の吾妻太郎齊藤越前守憲広（基国）といわれ、堅城を利して奮戦しましたが、ついに落城してしまいました。こうして岩櫃城は武田氏の手中に落ち、信玄は幸隆に吾妻郡の守護を命じました。

天正二年（一五七四）に幸隆が世を去り、岩櫃城主には長子の信綱が取りました。翌年、長篠の戦いで信綱、昌輝兄弟が戦死したため、真田家は幸隆の三男、昌幸が相続しました。その後、昌幸の長男信幸が支配し、信幸の弟幸村も少年時代をこの城で過ごしたと言われています。天正十八年（一五九〇）、北条氏が滅亡し、一度北条氏の支配下に置かれた沼田は再び真田氏の支配下となり、信幸は初代沼田城主となりました。岩櫃城は沼田の支城として吾妻郡統治の中心地としての役割を果たしました。

慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の戦いで昌幸（西軍）と信幸（東軍）は敵味方に分かれました。このとき岩櫃城は昌幸の叔父矢沢頼綱が城代となり、信幸方の城となっています。そして、幾多のドラマの舞台となった岩櫃城も徳川家康が発した「一国一城令（元和元年（一六一五）により、四百余年の長い歴史を残し、その姿を消しました。

岩櫃城落城伝説

貞和五年（一三四九）、ときの城主は吾妻太郎行盛、敵は里見義時（兵庫ともいふ）。要害の地を利用し難攻不落といわれた名城岩櫃城、しかも岩の上からは水が滝となって流れ落ち、城中の水は十分と思われていました。そこで里見は水口を断とうと里人を味方に付け、水口を奪取、落城は時間の問題となりました。このときの滝は米を落として滝に見せかけ



長福寺の五輪塔
中央が吾妻太郎の墓で両隣が夫人と臣下の墓と言われている。

ていたと言われています。もはやこれまでも…と行盛は討つて出、東側斜面を下り、敵陣を突破し、吾妻川立石河原へ出ました。行盛は大石にとび上がり腹をかつき切り立原河原の露と消えました。このとき自らの首を切り、対岸めがけて投げつけました。その首を祀ったのが首宮明神（現在の川戸神社）で、岩井地区にある長

岩櫃城破却

岩櫃城が壊されたのは「一国一城令」によるところが大きいと考えられますが、江戸時代の文献によると、慶長十九年（一六一四）に城下の平川戸（現在の登山口付近から貯水池付近）に市が立ち、多くの人出があったことを徳川家康が不審に



「根の木から子持岩を望む」
原町市街から子持岩がまっすぐに見通せ、根の木とを結んだ直線を町割りの起点としたことがよくうかがえる。

武田勝頼を迎えようとした御殿跡（潜竜院跡）

天正十年（一五八二）三月、武田勝頼は織田・徳川の連合軍に攻められていました。軍議の席上、真田昌幸は岩櫃城に勝頼を迎え入れ、武田の再挙を図ることを提案して許されました。昌幸は急ぎ帰国し、岩櫃山の南側に勝頼を迎えるための御殿（赤岩登山口近くに潜竜院跡として残っています）を三日間で造りました。しかし、勝頼は吾妻の地に来ることかな

わず天目山で自刃してしまいました。このときに勝頼が吾妻に赴いていたならば、岩櫃城は戦乱の舞台として時代の中心的立場に置かれていたことも十分に推測されます。急造された御殿は昌幸の一族である根津潜竜院と称して明治にいたり、明治十七年にその護摩堂が原町顕徳寺の本堂となっています。



潜竜院跡



顕徳寺本堂
現在の本堂は一部修復してあるが、明治当時のもの。